3分ではじめる、お仕着せのe-Learningからの卒業

角南 北斗（withComputer）
hello@shokuto.com

◎ Key Words　教育現場のIT活用，教材設計，授業のデザイン

1. 進まない教育現場のIT活用

この数年で、スマートフォンの一般利用者への普及は急速に進んだ。携帯電話キャリア各社から発表される新機種のほとんどはスマートフォンとなり、もはや「使わないのには何か特別な理由が必要」とでもいうような状況である。スマートフォンを通してITやWebの恩恵を受ける日常は、多くの人にとって当たり前のものとなりつつある。

それに対して教育現場はどうか。私がPCカンファレンスに初めて参加したのは2003年で、その当時いちばん印象に残ったのは、コンピューターをどう教育に活用したらよいのか戸惑う教育者の姿だった。それから10年が経ったいま、教師は学習者と同等以上に、ITやWebを「その本質的なところを押さえながら」活用できているだろうか。

2. 足りないのは教育に活用するスキル

トップダウンで組織全体にツール（ハードやソフト）を導入したものの、それが十分に使われないまま放置されているケースもよく目にする。放置されたそのツールを確認してみると、なるほど使い勝手が悪く「これは実用に耐えないな」と感じることは多い。この点は開発側に問題があるのだが、その一方で、その使い勝手を判断できるレベルまで使い込んでみる教師は少なく、多くは早々に感覚的な理由で「使わない」と決め込んでしまっているようにも感じる。

そうなる原因は、教師の側に基礎的なITリテラシーが不足していることにある。ここでいうITリテラシーとは「IT機器を操作するスキル」だけを指すのではない。それらも当然重要であるが、もっと教育的な資質、つまり「ITやWebの特徴をつかんで、各自の授業の文脈に位置付ける工夫をするスキル」も含まれる。そして、このスキルの不足こそが、教育現場のIT活用が進まない最大の原因だと、私は考えている。

3. 教材主導の授業設計に陥る怖さ

教育のIT化の一例として、教科書を「紙では不可能なインタラクティブなものに変える」という試みがある。これが効果を生むケースは少なくないだろうが、その開発には大きなコストがかかる。インタラクティブなアイディアを考えることや、それを形にする技術を考えると、紙でのそれのように誰もが気軽にとはいかない。その結果、今まで教師がそれぞれに行なっていた「教材を自分の授業に合わせて変えたり、その使い方を工夫すること」が減り、誰かの作った教材をそのまま使うだけ、教材に合うような授業にするといった本末転倒な授業設計に陥っているのではないか。

この教材は適切であるのか、授業の目的は何なのか、という自問自答をくり返して授業を設計することは、教師の大切な仕事である。どの現場も同じ画一的な教材があれば十分であるなら、現場ごとの教師の主体的な関わりは必要なく、極端に言えば教師は不要だということになる。

では、どうすればよいのだろうか。教師や授業の違いを考慮して、教材を個別に設計するのが理想ではあるが、上述のコストのこを考えると、それは現実的ではないだろう。

また、ITやWebの良さが生きるような授業にするということで、たとえば授業形式を「一斉講義型」から「学習者同士のコミュニケーション型」に変えるということも考えられる。が、これは教育内容から大幅な見直しが必要であり、誰もがそう簡単にできるものではない。

そこで、現行の「ITやWebを使わない授業」のベースまでは変えず、授業内のいくつかの要素に部分的にITやWebの良さを取り入れる方式が、多く

の教師にとって現実的で有効なやり方ではないかと考える。以下に事例を紹介する。

4. Webフォームで意見を集める

私は数年前から、大学生を対象に「プレゼンテーションのスキルの育成」に関する授業を担当している。プレゼンテーションの手法には絶対的な正解がなく、様々な視点を持つことで状況に対応できるというのが基本的な考え方である。そのため教師としては、学生の多様な意見を場でシェアしたい。だが、年度によっては100人近く受講者がいる場合があり、ディスカッション中心に進めるのは困難である。

そこで私は、Google Driveのフォーム機能による意見投稿システムを活用している。Google Driveの中のフォーム機能を使うと、Webアンケートが3分もあれば作成でき、寄せられた回答はExcelのような形に自動的にまとめてくれる。しかも利用はすべて無料である。

私の場合、自由記述の入力欄を１つ用意しただけのフォームを作って、そのページのURLを学生に伝えておく。授業中に、学生から自由に意見を聞きたくなったときや、質問に対する学生の回答を場で共有したいとき、そのフォームから回答するように指示する。

PCが配備されている教室であればそれから、そうでない教室の場合は学生個人のスマートフォンから、各自回答してもらう。教師は、教室のPCや自分のスマートフォンから回答を確認し、必要であればその画面をスクリーンに映し出すことで、場で意見のシェアができるというわけだ。

この方法のポイントは、準備に時間がかからず、いったんフォームを作ればどの授業にも汎用的に使えることである。どんな質問をするか、どんな回答を送ってもらうかなどは、授業の場面ごとに指示を出すようにし、フォームを特定の用途に作り込まないようにしておくほうがいい。

このフォームを利用することで、個別に学生を指名するよりも効率的に意見を集めやすくなり、挙手して発言するのが恥ずかしいと感じる学生の声を拾うことも容易になった。

また毎時間の終わりに、学生に「今日学んだこと」を振り返って言語化し送ってもらうことにも使っている。これは、学生にとっても教師にとっても、学びの評価に一役買っている。

もし、運用していくなかで「無記名ではなく記名式に」とか「回答は一人一回のみに制限したい」といった思いが生まれてくれば、それに応じてフォームを改良したり、専用のものを開発したりすればよい。その段階まで来れば、教師が授業の目的に合わせて主体的にツールを使えるようになっている、と言えるだろう。新たに教材を開発したり、ITを授業に生かすアイディアを出したり、環境整備をしたりする判断も、より的確に行なえるようになっているはずである。

5. まずは小さな一歩から

この文章を読まれている方の中には、何とも単純で原始的すぎる「IT活用」の例だと感じたかもしれない。しかし「こうしたことは教師なら誰もが自然に思いつく」というような状況ではないから、現場でITが十分に活用されず、質の低いIT教材が生産され続けているのではないだろうか。

ITを授業に活用しようとする際、これまで大きな壁となっていてはのは端末の配備であった。それゆえPCのある部屋のみに教育の場が限定され、思考もそこで止まっていた。だが、スマートフォンを学生が所持するようになったことで、どこでもITやWebを使える環境が整いつつある。これを利用しない手はない。あくまで教育のあるべき姿を中心に据え、ちょっとしたツールを、それが生きる部分に使ってみる。それが、e-Learningときちんと向き合う最初の一歩ではないだろうか。

発表者について

角南 北斗（すなみ ほくと）。大阪府在住。

大阪大学大学院で日本語教育を学び、日本語教師を経てフリーランスのWebデザイナーに。日本語教育や情報教育の分野で、Webサイトの制作だけでなく、教材開発、e-Learningプロジェクトのデザイン、講師、講演、研究発表などを行なう。

Official: http://shokuto.com
Blog: http://withcomputer.jp
Presentation: http://www.slideshare.net/hokuto/
Twitter: shokuto